

高齢者の生活様式と地域のコミュニティの 支援構造に関する研究

長谷川 裕紀* , 小川 正光

1. 研究の目的

現在、日本は世界の中でも例をみない速度で高齢化が進んでいる。総務省によると、平成 19 年から 65 歳以上の高齢者人口が 21%を超え、超高齢社会に突入した。

超高齢社会になり数年経過した現在、介護の担い手の不足や、年金問題等、様々な問題が発生し、このような問題に対する対策が早急に求められている状況にある。高齢者の生活の中で、日常の支援を受けながら生活できる安心・安全な住宅、生活地域の形成は重要である。現状の社会状況から、今後は、年金や社会福祉制度に全面的に依存することは難しくなると考えられる。生活者自らが相互に見守りや援助を行うコミュニティを形成し、安全を確保し、安心できる状況を作り出すことも必要となってくるであろう。

本研究は、地域での高齢者の見守り・支援について、10 年以上取り組んでいる愛知県半田市岩滑区を対象に調査を行い、高齢者の生活と地域の既存のコミュニティ、新たに形成されたコミュニティがどのように関係しているかに焦点を当て、コミュニティを通して実施されている支援のその効果を明らかにし、今後の方向性を提言することを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、次のような調査、資料をもとに分析した。

① 岩滑区 高齢者の生活実態の分析(卒業研究として実施した。再集計と分析を行う。)

平成 24 年 1 月 21 日～2 月 11 日に、岩滑区在住の独居高齢者(男性 4 名、女性 18 名の計 22 名)に対して行った調査票に基づいたヒヤリング調査

②半田市 高齢者施設の利用状況の分析(半田市が実施したアンケートを再集計する。)

平成 25 年 5 月 15 日～27 日に、半田市内にある高齢者が利用可能な公的施設の利用者計 294 名に対して行ったアンケート調査

③岩滑区 安住のまちづくりについての意向調査

平成 26 年 2 月 1 日～15 日に、岩滑区在住の「ごんの灯かり」設置者(138 名)に対して行ったアンケート調査

3. 岩滑区の概要

半田市岩滑区の人口は 6,620 人で、そのうち高齢者は 1,559 人である。世帯数は 2,419 世帯と

* 大学院・愛知教育大学家政教育専攻

なっている。岩滑区は、22の地区に分かれて形成されている。

岩滑区の年齢別人口比率を、愛知県と比較すると、55歳から89歳の割合が高く、今後も、高齢化が進んでいく地域と考えられる。また、岩滑区は、平成16年の自主防災会の再編以来、防災まちづくりに取り組み、平成23年に第15回防災まちづくり大賞の一般部門で、「防災時要援護者の支援から平時のつながりへー高齢社会に向けた優しいまちづくり」として総務大臣賞を受賞している。このように、この地域では、防災時要援護者へ災害時の支援をさらに発展させ、日常的に、高齢者や障害者が安心してくらせるまちづくりを目指している。この取り組みが23年度公益財団法人日本生命財団の助成事業となり、さらに新たな取り組みを進めている。

また、この地域のコミュニティ形成に有利な条件として、半田市内に立地する高齢者が日常的に使用可能な5つの施設のひとつである「やなべふれあいセンター」と、非営利団体「りんりん」が立地していることがあげられる(図1)。

4. 高齢者の生活様式

4.1 家族との関係

高齢者と家族間で行われている、最も高い往来頻度、連絡頻度は、表1のようである。

最も多いのは「週に1回」で、31%だった。次に22%の「月に1回」が多い。半数以上の高齢者が、月に1度以上家族と接していることが分かった。また、22%が「年に2～3度」しか関わらないことが分かる。

連絡頻度は、往来頻度に比べ高くなるが、最も回答数が多い項目は「用事があれば」(36%)である。しかし「毎日」、「頻繁に」、「週に1回」と回答した以外の高齢者は、緊急時に家族とは連絡が取りにくくなるため、地域のコミュニティの中で、何らかの対応・対策を考える必要がある。これらの高齢者は、「月に1回」も家族と接することなく生活しており、また、連絡も頻繁に取っていない事が分かった。



表1 家族と高齢者の往来頻度・連絡頻度

	往来頻度 (人)	連絡頻度 (人)
毎日	1	3
頻繁に		3
週に1回	7	1
月1以上	1	1
月に1回	5	2
年に2,3度	5	1
年1回		
用事があれば		8
不明	3	3
計	22	22

4.2 近隣住民との往来、挨拶

半田市岩滑区の高齢者は、住居年数・年齢が高くなるにつれて、日常的に往来のある件数が減ってゆく傾向のあることが分かった(表2)。これは、高齢化による身体機能の低下に伴い、介護施設等に入所して、かつての親しい高齢者が少なくなるため、外出頻度が下がったのではないかと考えられる。また、「日常的に往来がある」・「立ち話をする」という両項目に「いない」と31%割が回答しており、日常的に人と密接に関わっていない高齢者がいることも分かる。しかし、81%の高齢者が「近隣の人たちと挨拶する」・「だれとでも挨拶する」と回答していることから(表3)、この地域では、人間関係の形成の基盤となる段階は達成されていると考えられる。

4.3 その他の近隣関係

自由記述欄には、「自分の体調が悪い日には玄関の鍵を閉めずに就寝する」という回答が1名あった。「近所の車が動いていない際は連絡をする」(1名)、「近所の方が昼頃まで雨戸を閉めていると連絡をくれる」(1名)、「近隣の方に何か会った際の連絡先を教えている」(1名)といった、友好的な関係を築いている回答もあった。このような繋がりや、日常の挨拶から立ち話へと発展し、次の打合せをして集まる段階に到達していると考えられる。また、自主的に近隣の4人でグループを作り、(単身高齢者2名、高齢世帯2世帯)緊急時の連絡先を教え合い、毎日声を掛け合っている、という例もみられた。近隣住民との関係をより密接にし、家族も交え、住民が見守り体制を作っていることが分かった。

表2 高齢者が日常的に往来のある件数

	近隣の家	7件以上	5～6件	3～4件	1～2件	なし	計 (件)
1～4年					1		1
5～9年							
10～14年					1	1	2
15～19年	1						1
20～24年		1			1	3	5
25～29年							
30～34年		1			2	2	5
35～39年			1			3	4
40～44年			1	1			2
45～50年				1		1	2
計 (件)	1	2	2	2	5	10	22

表3 高齢者が日常的に挨拶を交わす件数

	だれとでも	近隣の人たち	7件以上	5～6件	3～4件	1～2件	なし	何かあれば	計(件)
1～4年								1	1
5～9年									
10～14年	2								2
15～19年		1							1
20～24年		3						2	5
25～29年									
30～34年	1	3				1			5
35～39年		1		1				2	4
40～44年	2								2
45～50年	1	1							2
計 (件)	6	9		1		1		5	22

5. 地域コミュニティ形成の歴史的検討

5.1 現在までの経緯

岩滑区は、昭和 35 年の伊勢湾台風以後、人口を増した。その後、「ゴミの集積問題」が浮上した。その際に、ゴミの集積場に主婦が集まり解決方法を探った。その集まりは、「ゴミ端会議」と呼ばれた。その後、「岩滑区コミュニティ推進協議会」が形成(昭和 50 年)され、ゴミの集積問題を推進協議会内の環境衛生部会が担うこととなった。当時の岩滑区コミュニティ推進協議委員会は、主にゴミ問題を扱う「環境衛生部会」、クラブ活動を担う「社会体育部会」、「文化教育部会」、行事を担う「企画広報部会」の 4 部会から成った。現在では 7 部会に細分化しているが、推進協議会発足当時から「やなべふれあいセンター」や「やなべコミュニティセンター」を中心に活動していた。

「やなべふれあいセンター」と「やなべコミュニティセンター」は併設しており、昭和 50 年に竣工している。竣工時から現在まで、様々なクラブ活動、講座、会議が行われており、現在ではサロン「花のき村」も併設している(平成 9 年竣工)。「花のき村」は、開設時から現在まで 60~80 名程度のコーヒーなどをサービスするボランティアによって運営され、成り立っている。

区内で現在活発に活動しているコミュニティは(クラブ活動、講座、花のき村の利用者、花のき村のボランティア、やなべ朝市¹⁾)、主に「やなべふれあいセンター」、「やなべコミュニティセンター」を中心に活動している。このように、地域貢献を目標として発生したコミュニティは、地域全体の活動を向上させるものとして、地域資源(公共的な施設)を利用して発達していくのではないかと考えられる(図 2)。しかし、高齢者の生活を見守るという観点では、日常的に見守っていないため、それだけでは高齢者の緊急時に際に対応しきれなかった。

5.2 新たな取り組み

公益財団法人日本生命財団の助成を受け、岩滑区は新たに「まちづくり委員会」を発足させた(平成 22 年)。この委員会には、区民(区の役員)の他に、地域の「非営利団体りんりん」や「半田

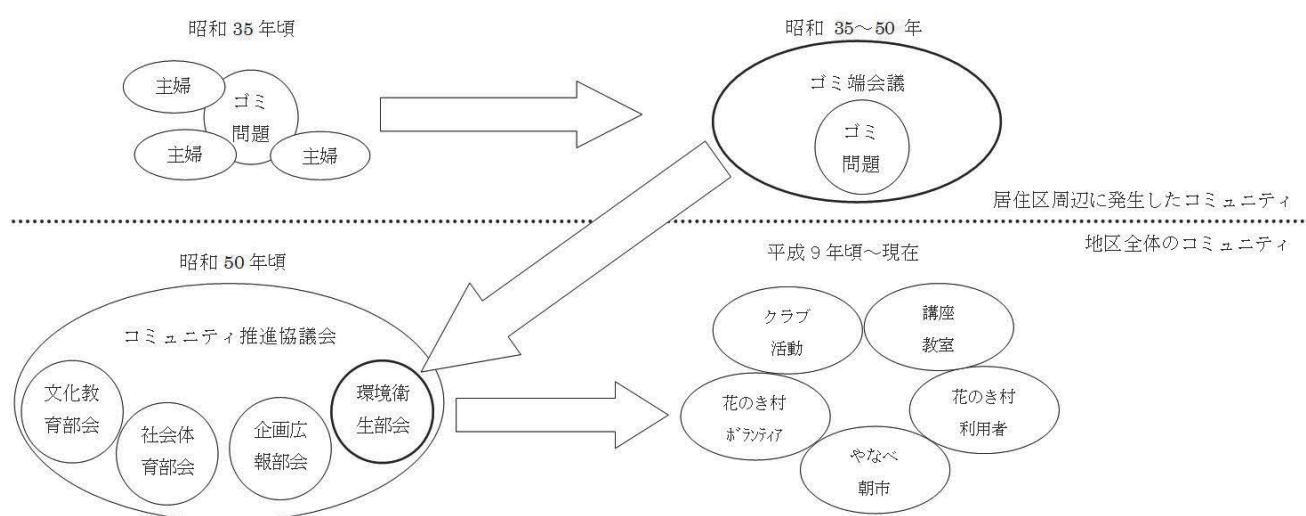


図2 岩滑区 コミュニティの形成過程

市社会福祉協議会」、大学関係者が参加している。他の地域では、非営利団体や社会福祉協議会が個々で様々な取り組みを行なっているが、連携して取り組んでいることが特徴と言える。区と非営利団体、社会福祉協議会が連携することにより、様々な観点からの取り組みが可能となっている。例えば、非営利団体が地域内の認知症高齢者を把握し、社会福祉協議会が認知症サポート養成講座の講師を務め、場所・受講者のコーディネートを区が行っている。このように、それぞれの特徴を生かした活動が有機的に行われている。

6. 近年における新たなコミュニティの形式

6.1 ごんの灯かり

「まちづくり委員会」の提案により、新たな高齢者の見守りシステムとして「ごんの灯かり」が考案された（平成 24 年）。「ごんの灯かり」とは、LED ライト 2 色を玄関先に設置し、LED ライトを切り替えるためのスイッチを室内にも付けたものである（図 3～図 5）。毎日、朝と夜に色を切り替えることを約束とし、2～5 人のグループで設置し、設置後は、互いに設置した LED をグループ内で毎日確認し、異変があれば声をかけるというものである。このグループでの活動を、岩滑区では「朗朗見守り」と名付けた。「気軽に、お節介にならない見守りをしたい」という意味が込められている。

高齢者相互が見守りあえる生活の支援者となっているために、設置（見守りグループの形成）後には、あまり公的機関が介入する必要性がなく、区民の自発的な活動の歴史の上に成り立つ取り組みである。現在では、設置者グループ内での親密度を高めるために、設置者同士のあつまり「ふれあい会食会」を、定期的に区の役員がコーディネートし、「非営利団体りんりん」が運営する「茶屋」を利用し、設置後 2～3 週間の間に 1 回、催されている。

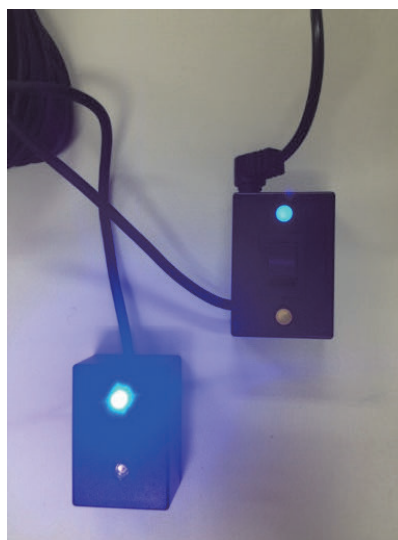


図 3 ごんの灯かり
日中は青色をしている



図 4 ごんの灯かり
夜間の外観の図



図 5 ごんの灯かり
室内、実際の設置時の様子

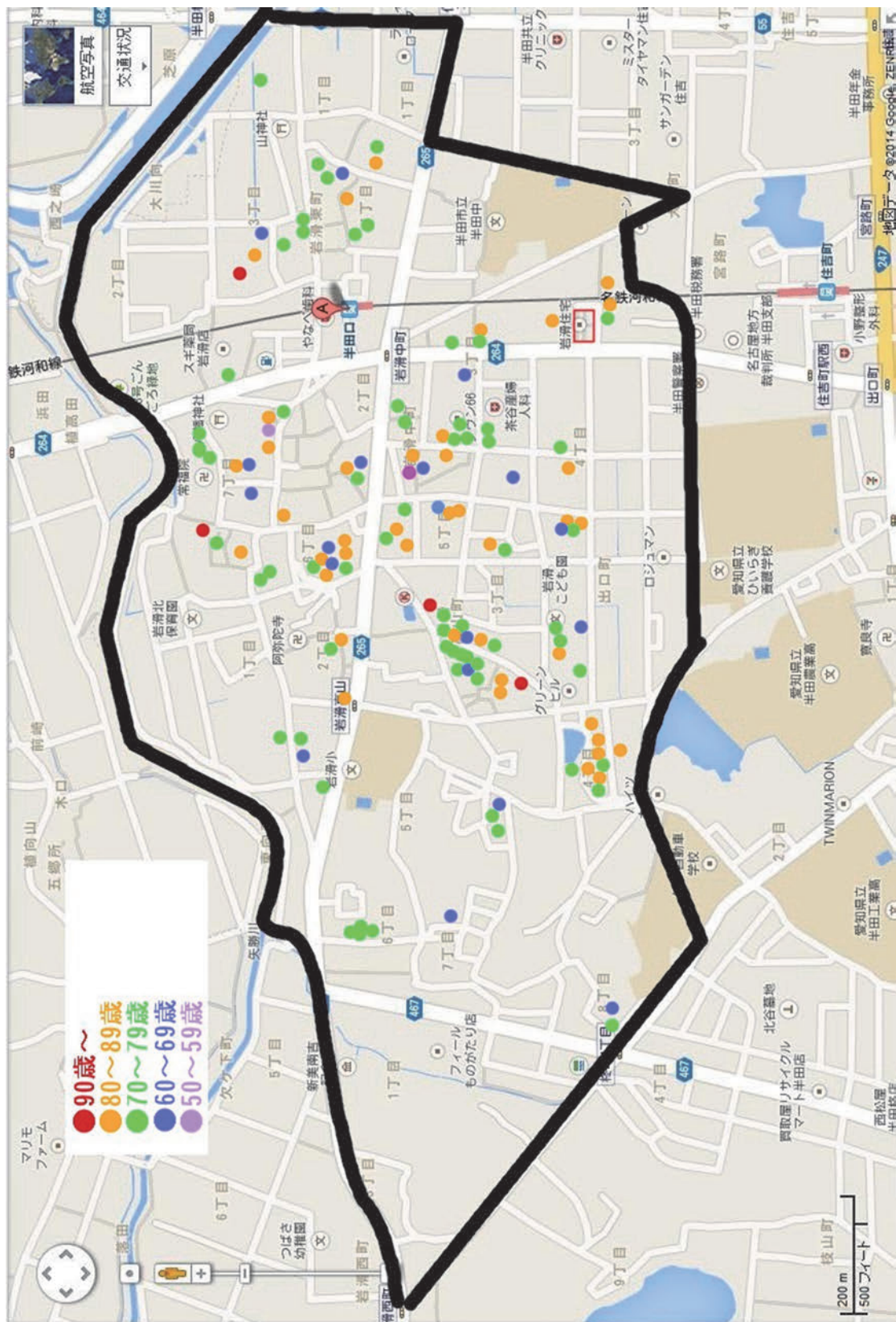


図 6 年代別、設置者の居住地

*) 図は、Google の地図を用いて作成。

「ごんの灯かり」設置者は図6のように分布しており、グループで設置することを原則としていることがわかる。しかし、最も東に1戸だけ孤立した設置者がいる。それは、この地域は住居が少ない地域であるため、今後は設置者を見つける必要がある。また、西側の60歳代の孤立した設置者は、北側の70歳代の4戸と同じグループに属し、近隣でのグループ形成という原則からはずれている。

設置者の年齢と居住形態は表4のようになり、独居高齢者、高齢者世帯だけでなく、50歳代の設置者も2名みられる。70歳代の夫婦世帯が最も多く設置しており、夫婦であっても「いつかは一人になるから。」ということであった。このような高齢者世帯夫婦は、独居となった後も「地域で暮らしていきたい。」という気持ちが強い印象を受けた。また、50歳代の夫婦からは、「いつかは私たちもお世話になるから。」という理由で、現在は見守りの方を担う意向での設置である。このような相互に協力して地域の生活を維持するという気持ちを持った居住者が、「ごんの灯かり」を継続していく上で不可欠である。

表4 設置者の年齢、居住形態

	独居	夫婦	夫婦＋息子	夫婦＋娘	その他	無記入	総計(人)
50代		1			1		2
60代	7	6	2	1	4	1	21
70代	22	27	6		4	2	61
80代	22	13	1		3	1	40
90代	8	1					9
無記入	2	1				2	5
総計(人)	61	49	9	1	12	9	138

(1)「ごんの灯かり」の異常発見後の対応

「ごんの灯かり」での見守りの方法は、以下のようなものである。住宅地域における小規模な見守りグループで、もし灯かりの切り替えがない住居を発見した場合には、まず声をかけ、応答がない場合は電話をし、それでも出ない場合は区(区の役員)に連絡が行くようになっている。そして、区から家族へと連絡が行く仕組みとなっている²⁾。

もし室内で倒れていたり、意識を失っている緊急を要する場合の対処として「救急医療情報キット」も配布され、活用されている。これは、筒状のケース内に緊急時の連絡先、常備薬等を記入し、冷蔵庫内に保管するもので、緊急時には、冷蔵庫内を見ることで情報を得て対応をする。消防署とも連携し、岩滑区内の高齢者が室内で倒れていた場合は冷蔵庫を見ることになっている。

しかし、これらの緊急時に対応する設置機器の周知度をみると(表5)、「ごんの灯かり」を「家族に話さずに設置した」(8名)、「家族の理解を得ないまま設置した」(12名)という回答がある。家族がこの装置を知らず(理解せず)にいと、緊急時に対応が遅れる可能性がある。

また、「救急医療情報キット」を「知らない」という回答も15名あった(表5)。この15名は、緊急時に家族と連絡が取れない危険性があるために、このような回答者を減らす努力が必要である。

表5 ごんの灯かりを家族が理解しているか

		緊急医療情報キット			総計(人)
		知っている	知らない	無記入	
ごんの灯かり	理解している	84	10	5	99
	話していない	5	3		8
	理解を得ていない	11	1		12
	その他	5	1		6
	無記入	10		3	13
	総計(人)	115	15	8	138

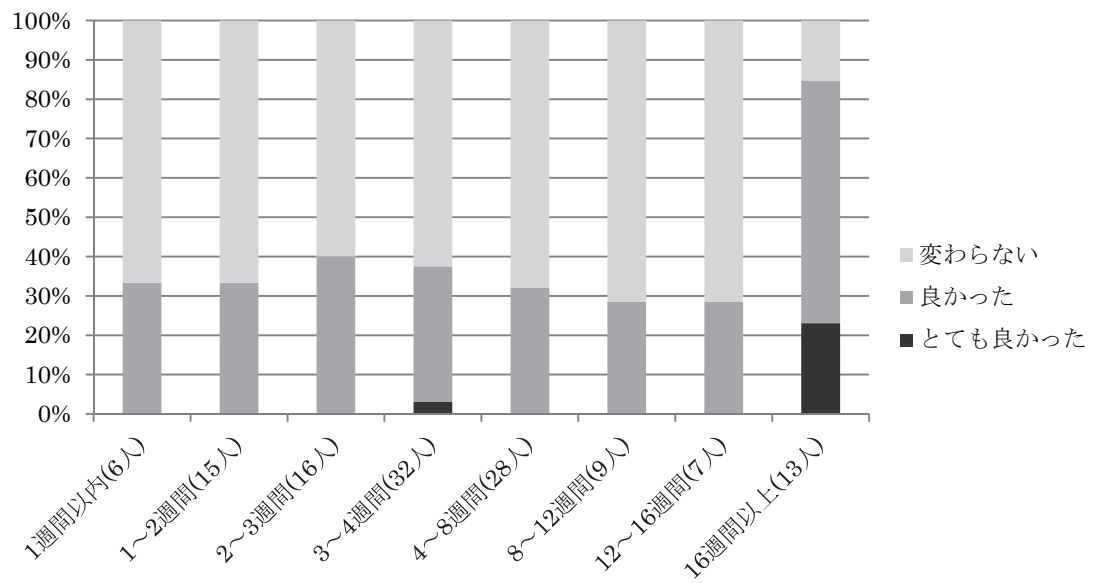


図6 設置期間別、設置後の感想

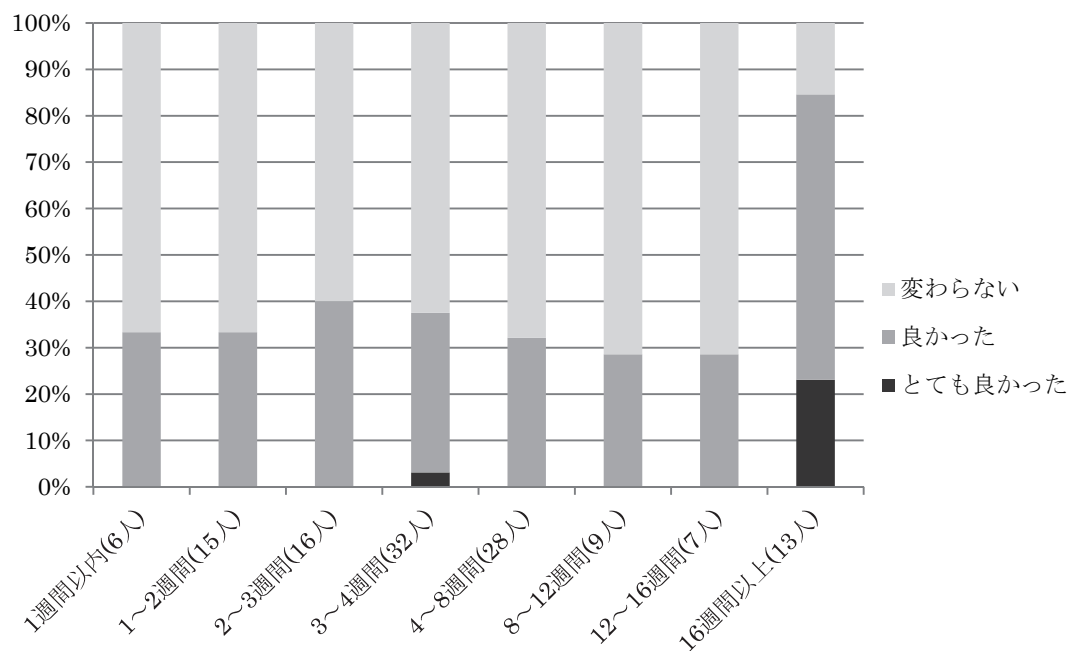


図7 設置期間別、設置後の会話の増減

(2)「ごんの灯かり」の効果

設置者に対し、設置した感想を「とても良かった」、「良かった」、「何とも思わない」、「取り外したい」という4項目で集計した結果(図6)、「取り外したい」という回答は1件もなかった。設置後の期間別にみると、16週間以上で顕著に「良かった」と感じる事が分かった。また、会話の増減についても、「とても増えた」、「増えた」、「以前と変わらない」、「減った」という4項目で聞いたところ、「減った」という回答はなく、設置後16週間経過した後、急速に会話が増え、近隣のコミュニティを形成する効果があることが分かる(図7)。

「ごんの灯り」について、設置期間別に取り付けた理由をみると、4～8週間の期間で「近隣の人勧められて」という項目が多く回答されていた(図8)。このようなシステムは、設置後4～8週間ほどで近隣住民に認識され、その後話題となっていくのではないかと考えられる。

それらを整理すると、時期別に、図9のように設置後の変化していく過程を、3段階に整理することができる。まず、「ごんの灯かり」設置者と、未設置者の間で話題となり始める。次いで、「ごんの灯かり」設置者と、新規設置者の間で会話が増えて行き、それがコミュニティとして確立してゆくのである。

また、自由記述欄への記載が39件あった(表6)。19件には「安心」という言葉が含まれており(黄色)、10件には「見守り」という言葉が含まれていた(橙色)。このうち5件はどちらの言葉も含まれていた(緑色)。このことから、設置することで、「見守られる」という感覚と、「安心感」が高まるということが分かる。他には、「やることができてうれしい」や、「朝、夜のメリハリが増えた」と、生活に関する事項や「ものの押し売りが来なくなった」、「町が明るくなったのを実感する」といった回答があった(表6) その半面、「切り替えのプレッシャーあり」といったマイナスの回答もある。

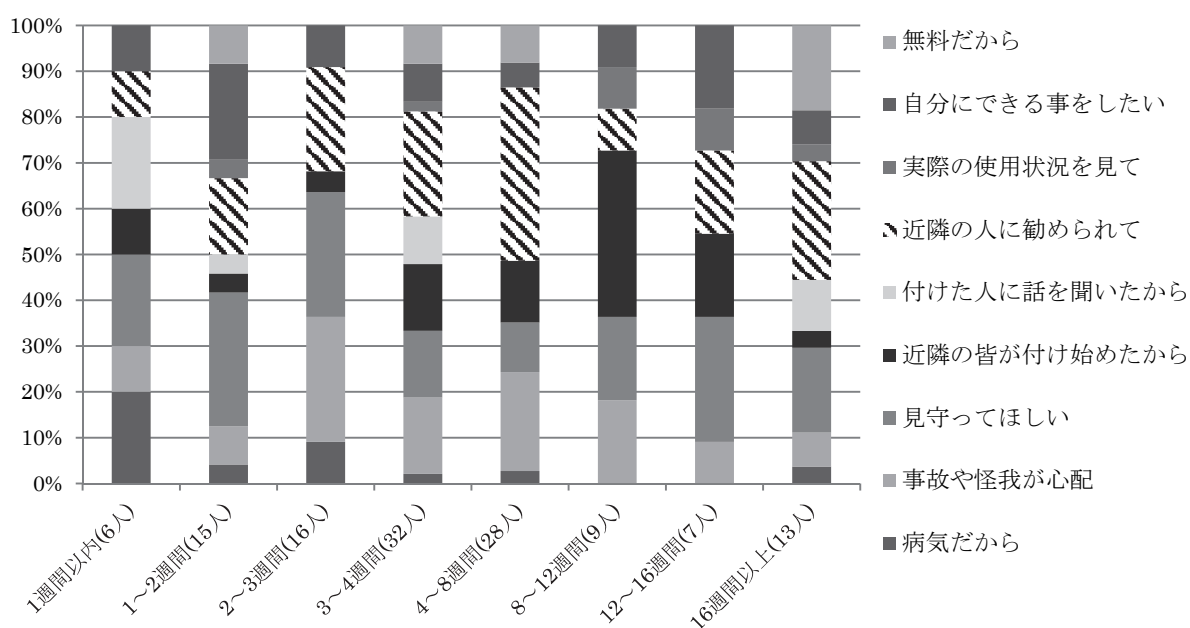


図8 設置期間別 設置理由

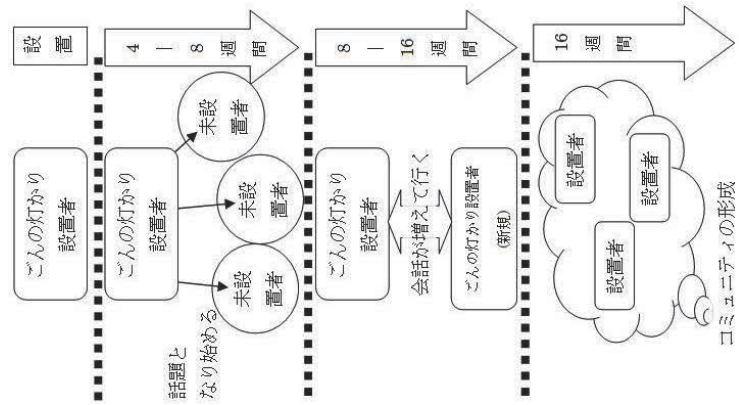


図9 コミュニティの形成過程

表6 設置した感想(自由記述欄)

一人暮らしに安心感。近所の人が見守ってくれる	朝早く、規則正しく
見守ってくれることが安心につながるのでは	よそに関心をもてた
見守られているという安心感。灯かり設置者に話しかけるようになった	普及段階、住民の理解を得られるといい
隣同士が見守っているから安心	まだわからない
見守られているという安心	他の灯りが気になるようになった
安心	まだ元気が、安全のため
安心感、皆にみてもらええる	「何かをする」というテーマができた
安心	取り付け工事が難だったが、狭い場所なので仕方ない
安心	隣の方が気にしてくださる
安心感	夕方になると、隣のこんの灯りがついて自分も気付けて良い
安心感	忘れずに、心をかけている
お互いに安心感がある	朝・夜のメリハリができた
安心反面老人夫婦と知らせている	連帯感が増した
心配がなくなり安心できた	切り替え忘れ
安心感がある	絆が深くなったように感じる
ついでに安心	意識を高めるのに役立っている
安心感がある	認知症の人には難しいかも
安心感がある	近所で付けた方とお話しする機会があまりないので分からない
安心感	切り替えにプレッシャー有り
近所の人が見守ってくれるから	心配してもらえ
近隣をよく見守るようになった	ほっとした
外部からそっと見守る、絆とすることができる	何となく親近感をもつ
見守ってもらえ、元気が分かる	付ける前は雨回しまってるで電話くる
近所の方に見守られている	あるこう会で、町が明るくなったのを実感する
ものの押し売りがなくなった	皆がつけているから
近隣の方たちの状況が外から判断	仕様で早く出かける時は忘れがちで、まわりに迷惑かけてる
外出中も灯かりの切り替えが気になる(夕)	「安心」「見守り」を含む
あまり家にいないから実感わかない	「安心」を含む
	「見守り」を含む

6.2 「やなべお助け隊」

「やなべお助け隊³⁾」は、有志高齢者(現在 30 名ほど)によって平成 23 年度に結成された。目的は、生活の中で困ったことがあった際に、どんなことでも高齢者相互で手助けをすることである。区の役員が、隊長を務めている。困りごとがあった際には、区に連絡が行くようになっている。活動内容は、生活の援助(電球の交換、庭の掃除、家具の移動など)、小学校からの依頼(行事のお手伝いなど)、社会福祉協議会からの依頼(社会福祉実践の補助など)、様々な依頼に対応している。また、ペンキの塗り替えなども行っており、はけ等の道具を保管する倉庫を「やなべコミュニティセンター」に備えている。

「やなべお助け隊」は、高齢者の隊員同士での連絡も行くと同時に、地域の多くの区民や小学生とも話している。高齢者の生活の補助をしながら、地域の様々なコミュニティ同士を繋ぐ役割も持っているといえる。特徴的なのは、「小学校」の授業や行事に参加していることで、児童たちに「地域にこのような高齢者がいるよ」と認識させるための役割も有している。

発足当時はボランティア活動だったが、現在は、継続を考慮して有償ボランティアへの切り替えが検討されている。

6.3 新たなコミュニティの特色

「ごんの灯かり」、「やなべお助け隊」に共通している点は、高齢者が居住する住宅の近隣である居住地が活動の対象となっている点である。今までに形成されてきている「クラブ活動」や「やなべ朝市」は、地域のほぼ中心に立地する「やなべふれあいセンター」を中心に活動しており、集まる人数が 10 人以上になることも珍しくない。しかし、「ごんの灯かり」や、「なべお助け隊」が繋ぐコミュニティは、「居住者」と「居住者」または「居住者」と「隊員」というように、1 対 1(もしくは 2~4 人)が基本となる。小規模でかつ、生活圏内での繋がりを形成することにより、1 日を通しての日常生活を見守っていると考えられる。

7. 中心となる「やなべふれあいセンター」

7.1 「やなべふれあいセンター」の評価

「やなべふれあいセンター」は、半田市内の高齢者が日常的に利用可能な施設(「やなべふれあいセンター(以下①)」、「かりやど憩いの家(②)」、「さくらの家(③)」、「亀崎地域総合センター(④)」、「半田市老人福祉センター(⑤)」)と比べ、評価が高くなっている(図 10)。満足度と比例している利用理由は、「雰囲気が良い」だったことから、「雰囲気が良い」ことが満足度に繋がるのではないかと感じられる。

①は、他の施設に比べ、利用効果の「人と話す機会が増えた」、「余暇の楽しみが増えた」という項目が多く回答されており(図 11)、さらに利用理由の「家族・友人に勧められて」という項目が、②~④に比べ半分以下の回答となっていることから、自らの意思で「人と話すため」、「余暇の楽しみのため」に、施設を利用していると言える。人と話すことで余暇の楽しみになり、人

と話しやすい空間が満足度の高さに繋がるのではないかと推測される。

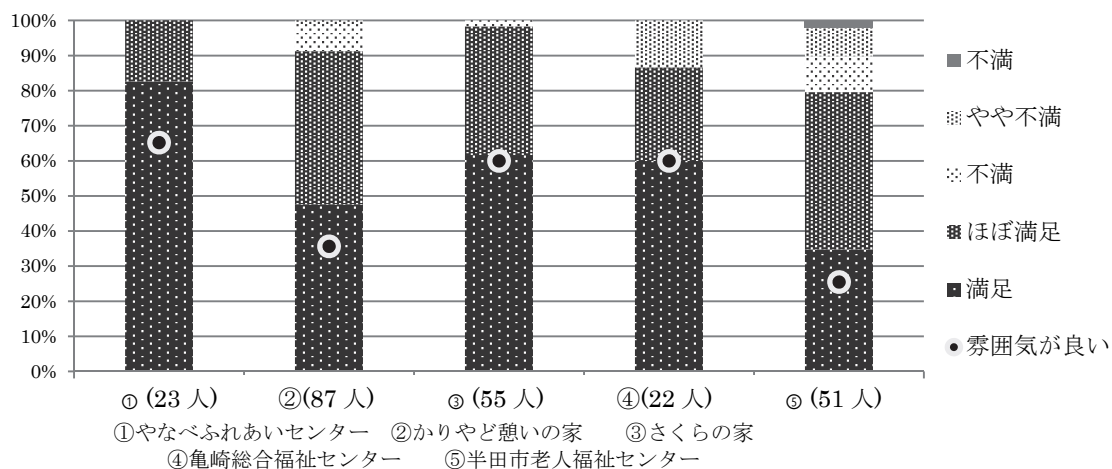


図 10 各施設の評価と利用理由「雰囲気が良い」

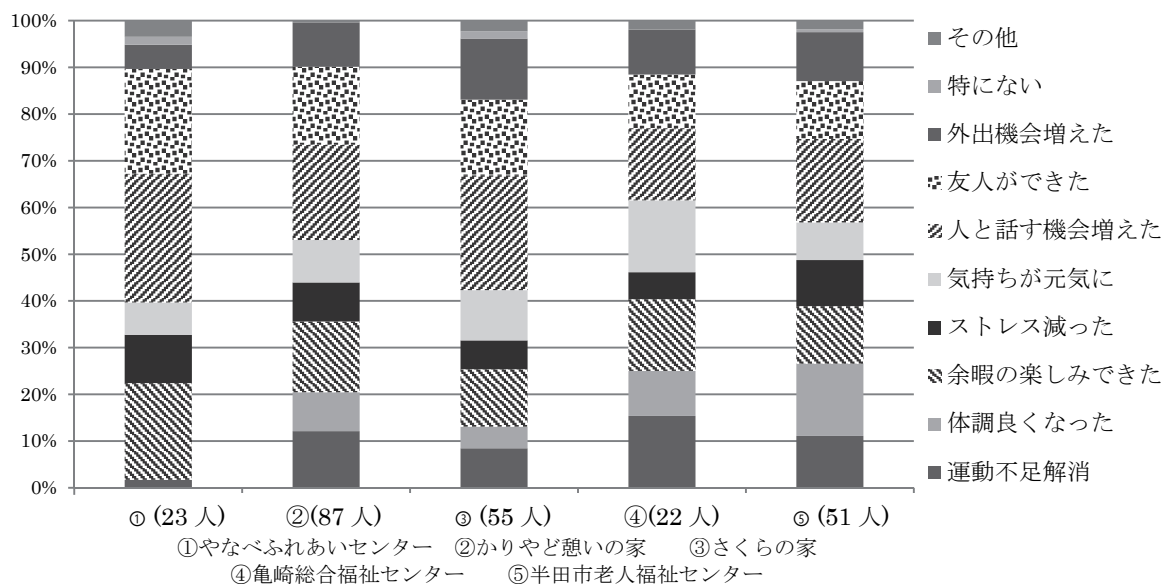
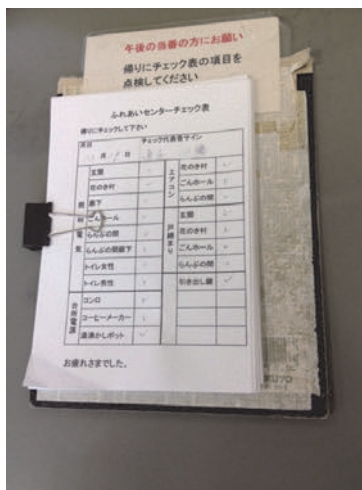
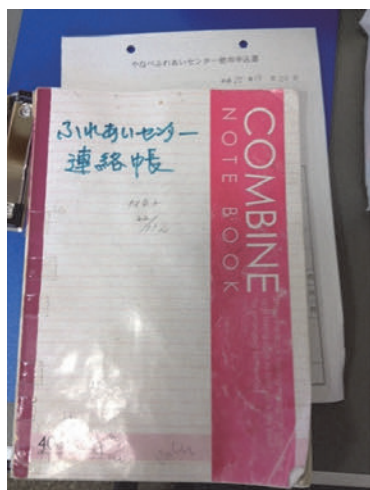


図 11 各施設の利用効果



右：図 12 ふれあいセンター連絡帳

左：図 13 ふれあいセンターチェック表

7.2 「やなべふれあいセンター」の運営

「やなべふれあいセンター」は、定期的に、区の役員がクラブ活動や講座のコーディネートを行っているが、運営の仕組み(図 12, 13)を作り、すべての活動が利用者によって運営されている。連絡帳を設け、何かあった際には書き込むようになっており、配布物等もこのノートに挟まれている。また、ふれあいセンターの鍵の管理も担っており、退出時にチェック表に記載されている仕事を全て行う決まりとなっている。なお、この2つは「花のき村」内に設置しており、「花のき村」のボランティアが、チェック表の仕事をこなし、鍵を閉めている。

7.3 「ふれあいセンター」との繋がり

「花のき村」を利用していない「ごんの灯かり」の設置者は、58名(42%)いる。このうち6名は、「身の回りで花のき村のでの出来事が話題として出る事がありますか。」という質問項目に対し、「ある(2名)」、「たまにある(4名)」と回答している。これらの居住者を地図上にプロットしてみると、「花のき村」利用者の隣又は向かいに居住していることが分かった(図 14 の★印)。このうち4戸は、隣近所に「花のき村」を「毎日利用している」、「週に2～3回利用している」高齢者が居住していることから、頻繁に「花のき村」を利用している居住者から「花のき村」で交わされる地域情報に間接的に聞いているのではないかと想像される。

鉄道線路の東側に居住している2戸は、「花のき村は利用していない」が、「あるこう会」に参加していると自由記述欄で回答しており、「あるこう会」に参加していれば、「花のき村」の話題を耳にしているのではないかと考えられる。

近隣で、居住者に身近に形成されている「ごんの灯かり」や「歩こう会」に参加することにより、その中の一部の高齢者が、区の広い地域から高齢者が集まる「花のき村」、「やなべふれあいセンター」での情報を得る、という段階的な構造が把握される。

このような話題の共有が行われることによって、居住者の地区全体への興味、関心が強くなり、区への信頼が形成されるのではないだろうか。現在岩滑区は、「見守り」に重点をおいて活動しているため、区への興味、関心が強くなることが、地域の高齢者全体の「見守り」の強化に繋がると考えられる。

また、「近隣から区の行事や講座へ誘われるようになった」という回答が9名、「自分が区の行事や講座へ誘うようになった」という回答が9名あった。「ごんの灯かり」を設置するだけでも「ふれあいセンター」への関わりを持つことがわかる。このように、地域全体のコミュニティが形成されている地区では、居住地区周辺でのコミュニティを作ること、さらに地域全体のコミュニティへの参加率も高くなると考えられる。

8. まとめ

岩滑区のコミュニティの形成過程は、次のような段階を経て形成されたとまとめられる。

①地域全体のコミュニティの形成（ふれあいセンターを中心とした、区の問題を解決）

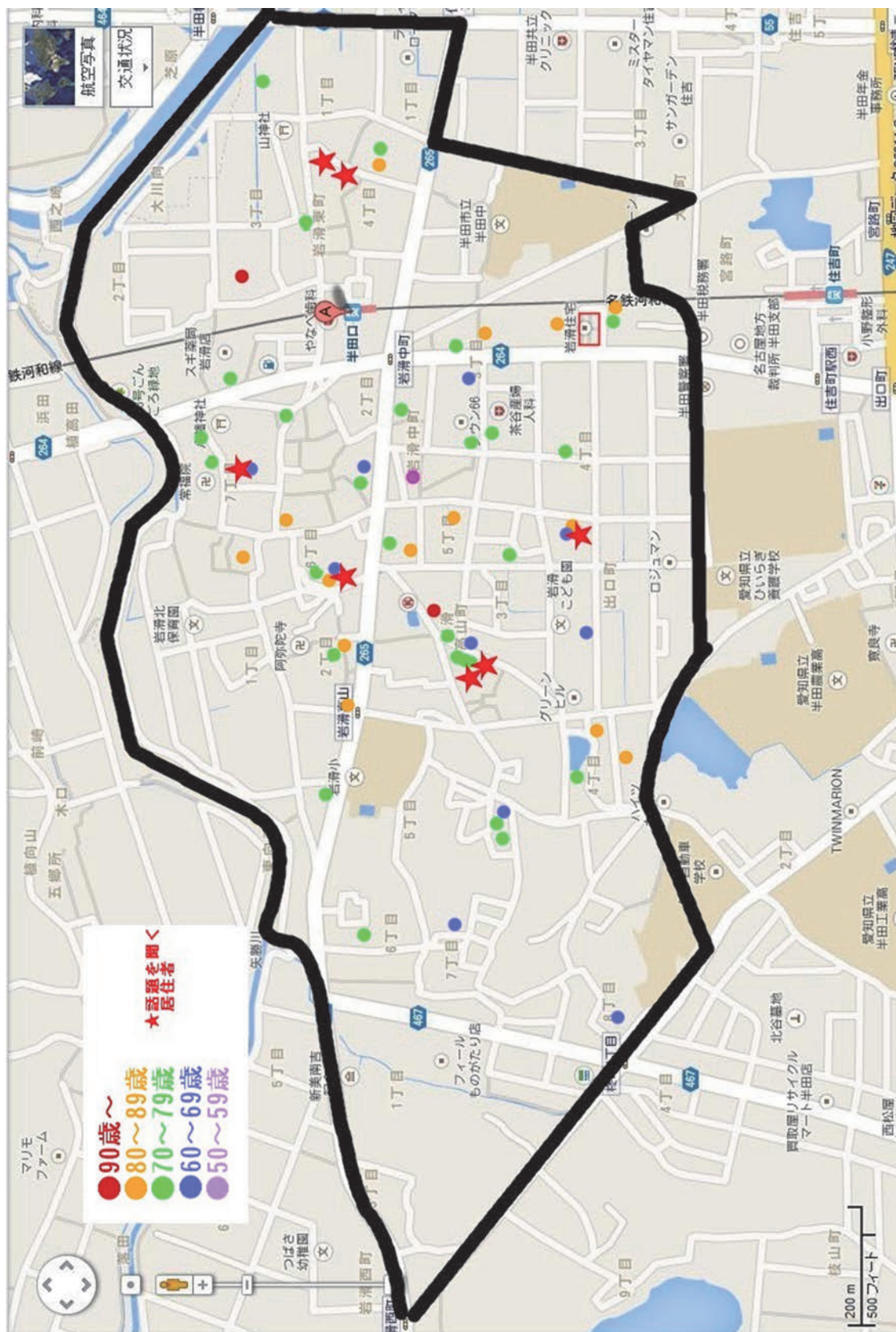


図 14 「花のき村」の話題を聞く居住者(★)

*) 図は、Google の地図を用いて作成。

- ②趣味、交流のコミュニティの形成（ふれあいセンターを中心とした、講座やサークル）
- ③不特定多数の交流のコミュニティの形成（花のき村の運営による高齢者同士の交流）
- ④生活の問題解決としてコミュニティの形成（高齢者の生活内の見守り）

以上のように、まず公的施設を中心に、地域全体で構成されたコミュニティが形成され、次第に居住地周辺のコミュニティができる過程が読み取れる。このように段階を踏むことによって、スムーズに形成されたと考えられる(図 15)。共通の目的をもった広範囲に広がるコミュニティから、施設を利用した小さなコミュニティを作り、次いで生活に即した見守りができるコミュニティを形成することによって、高齢者は、より安心し、地域の中で生活を送ることができるようになる。そのためにも、地域を中心となる施設・場所を設ける必要があり、その場の運営を支援していく必要がある。このような活動が継続的に行われることを考慮すると、高齢者のみではなく、他の世代の認知や参加も大切になる。

コミュニティの段階的な形成をみると、岩滑区にはもともと人の集まれる環境があったことも注目される。地域全体のコミュニティを形成したのち、近隣居住区のコミュニティ形成へと段階的に進んだ。これが、高齢者の相互見守りに有効となったのではないだろうか。

居住地周辺でのコミュニティを形成することは、日頃の生活の中で顔を合わせる頻度、会話を交わす頻度の増加に繋がる。高頻度で顔を見て、会話をすることにより、微妙な体調の変化や、生活の異変に気付く確率が上がり、より確実な見守りとなる。

また、地域内の住民だけでなく、居住者の家族とも連絡を取れる仕組みを作っておく必要性が読み取れた。現在、「ごんの灯かり」では緊急時には、まず区に連絡がいき、次いで家族に連絡が

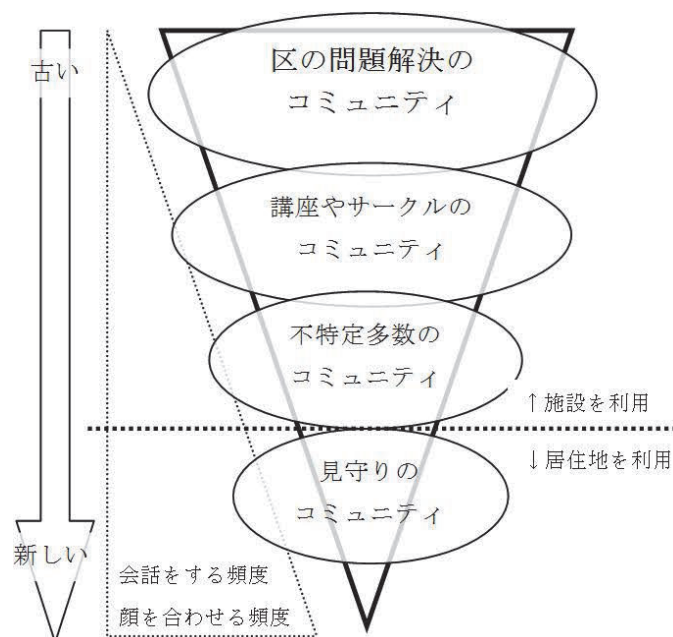


図 15 コミュニティの形成過程

行くようになっている。このように、主体は地域住民だが、全体的なバックアップを区や市が支援していく構造が望ましい。岩滑区では、支援者として、区の役員だけでなく非営利法人や社会福祉協議会と積極的に協力している。他の地域においても、地域資源を最大に活用しながら地域の特色に沿った構造を形成していくことが示唆される。

註

- 1) 農協等に卸すほどの量を生産していない地元の農家の販売場所の確保と、「地域の野菜を食べたい」という消費者のニーズが合致して行われるようになった。毎週土曜日、朝 8:00～12:00 頃までふれあいセンターの駐車場で行われている。利用者は、ふれあいセンターに講座やサークル等で来るついでの方が多い。
- 2) 平成 16 年、区の住民台帳を再編した際に高齢者には緊急時の連絡先も登録するように促した。
- 3) 公益財団法人日本生命財団の助成を受け、統一したユニフォームと帽子を作成した。ユニフォームは蛍光のオレンジ色をしており、遠くからでも活動している様子が分かるようになっている。

参考文献

- 1) 総務省統計局：平成 24 年度「国税調査」
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi721.htm>
- 2) 総務省：平成 26 年度「高齢者白書」
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf_index.html
- 3) 厚生労働省：社会保障審議会 第 47 回介護保険部会「資料 3」
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000021718.pdf
- 4) 大橋謙策・白澤政和：「地域包括ケアの実践と展望」,中央法規,2014
- 5) やなべの歩み編集委員会：「やなべの歩み」,1985
- 6) 総務省：第 4 回コミュニティ研究会参考資料,2017
- 7) 太田礼美・小松尚・川端寛文：「半田市岩滑区における高齢者の見守りに関する住民の認識」,日本建築学会東海支部研究報告集 第 51 号,2013